

ランニング学会ニューズレター

No.13 11・9・27 発行 ランニング学会広報委員会

ランニング学会事務局 〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学大学院人間総合科学研究科 鍋倉研究室 office@e-running.net

ランニング学会新体制

ランニング学会理事長 藤牧利昭

ランニング学会は2年ごとに役員改選選挙を行い、学会大会時に開催される学会総会で役員が決定します。今年が改選時期で選挙は実施しましたが、ご承知の通り、東日本大震災があり、学会大会および学会総会は開催されませんでしたので、正式議決に至っていません。震災で被災された方、今も復興途上にある皆様には、この場を借りてお見舞い申し上げます。

ともあれ、新体制についてご説明させていただきます。会長は、引き続き有吉正博先生ですが、歴代の会長、副会長をお務めいただいた山西哲郎先生、宇佐美彰朗先生に、顧問にご就任いただくこととなりました。これで、初代会長の山地啓司先生を含め、ランニング学会の主軸であった先生方3人が顧問になっていただけたことになり、今後とも、大所高所から学会の方向性についてご助言いただけるものと存じます。また、豊岡示朗先生が理事長から副会長となり、学会を支える立場から、リードしていく立場になりました。既に、いくつかの発展的なテーマをご提案いただいております。そして、後任に私（藤牧）が就任しました。従来は、理事長のところに事務局が置かれ、正式に事務局長というポストはないものの、事実上、理事長が事務局長を兼任していました。新体制では、諸般の事情に鑑み、事務局を筑波大学鍋倉研究室とし、鍋倉賢治先生に事務局長を務めていただくこととなりました。綿密に連携を取りながら、学会の運営にあたっていきたいと考えています。

新体制の委員会組織は、基本的には、前年度までと変わりませんが、新たに、Position Stand委員会を立ち上げることにしました。ランニング学会が、学会員だけでなく、社会に向けて情報発信していくことを担っていく委員会です。既に、ランニング学会の見解として、ランニング学研究 22 巻 1 号に「マラソンレース中の適切な水分補給について」を発表しておりますが、社会的使命としてそうした情報発信を継続していこうとする姿勢です。学術的情報を発信する媒体は、ランニング学研究ですが、学会からの情報発信という点では、ホームページの役割も極めて重要です。そこで、頻繁に情報発信していくために、有為な人材として、若手の齋藤祐一先生に事務局幹事として運営に加わっていただき、随時、最新情報をお届け出来る体制ができました。既に、ホームページのリニューアルはご確認いただけているものと存じます。

さて、私は3月まで副理事長だったわけですが、理事長となって改めて考えますことは、第一に学会の安定的運営であり、次いで発展的運営となります。安定的に運営していくには、大塚製薬様はじめ賛助会員の方々のサポートも重要ですが、何より一定規模の会員数が必要だと感じています。さしたる根拠はありませんが、概ね2,000人規模であれば、ある程度安定した運営が可能ではないかと思っています。そのためには、まずは身近にいらっしゃるランニングクラブ(AVRC)の方々に入会していただくのが有効と考えます。3,000人の会員の3割の方が入会すれば900人増で、一気に目標の6割程度に達します。会員の方へのアンケート調査では、「講義の多いクラブ」「講義を増やして欲しい」会員の方は、ランニング学会への関心が高くなっており、このクラブの目指すべき方向性を感じています。

発展的運営に関しても、AVRCが大きなカギを握っていると考えています。AVRCの方々に確かな指導を提供することを一つのきっかけとして、「指導員養成事業」がスタートしていますし、2011年8月に発刊した「ランニングリテラシー」を生むきっかけにもなっています。また、年間100万円(初年度は300万円)の助成研究を行っているのも、AVRCの存在が契機となっていますし、学会発表を見ても、AVRC関係の発表が多くみられるように、AVRCは、さまざまな面から学会活性化に貢献しています。

研究者、指導者だけでなく、ランニングを愛好する方々も一緒に会を作っていこうというのが、ランニング学会の基本理念ですから、AVRCの発展は、歓迎すべき状況と考えます。そこでAVRC会員の中から佐藤英子さんに理事になっていただき、ランニングを愛好する方の立場から学会発展に貢献していただこうと思っています。もう一方で、ランニング学会の課題は、人が一生のうちにランニングとどう付き合っていくかを決定するのに重要な立場にいらっしゃる小中高の先生の参加です。その意味において、小中高の教育現場に精通していらっしゃる佐藤善人先生に理事になっていただいたのも心強い限りです。

理事長の重責を、私がどこまで担えるか判りませんが、多くの方々のご協力を得ながら、学会の発展を支えていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いたします。

鳥取マラソン2011「勇気と心を届けよう」

清水 泰生

鳥取は私の郷里であり、鳥取マラソンは、私にとって比較的走りやすいコースだったのと、研究の関係でお世話になっている油野先生が鳥取大学を今年ご定年なので、先生の前では是非走りたいかったので、11月の受付開始と同時にエントリーした。その後、年が明けてすぐに鳥取の母が急死し、母の供養のため別大マラソンでサブ3をと思っていたが、別大マラソンは不完全燃焼におわり、その後の泉州マラソンも30キロ失速、母の亡くなった地鳥取でサブ3をと思っていた。そんな矢先に東日本大震災があった。信じられない光景だった。その時、鳥取マラソンは開かれるのかなと思った。これは、無理だと思った。しかし、その時テレビで1995年阪神淡路の震災の一週間後、神戸の悲惨な様子に変わって、東京シティーハーフマラソンの様子がテレビに映し出されたことを思い出した。その時一瞬、違和感はあったが、そのあとすぐ、元気な地域は元気である姿を見せることが日本全体にとって大切だと思った。だから、被害のない鳥取は開催すべきだと思った。そして、開催についてどうなっているのかとホームページを見たところ、ホームページの掲示板には、こんなときにイベントを開くなんて、自粛すべきだ等の開催反対意見と、被災地でないところは元気を出して被災地に届けようという開催賛成意見が乱れ飛んでいた。両方の言い分はよく分かる。主催者側の意見はどうかと思い、探してみたが、主催者から何も声明が出ておらず、主催者はかなり苦渋しているのだろうなと思った。

3月11日以降、各地のマラソン大会が中止になって、一体どうなるのか気になっていたが、3月15日に開催が決まり、ホームページに声明文が発表されていた。その声明文には、この大会を被災地・被災者を支援し激励する大会と位置づけ、「勇気と心を届けよう」をキャッチフレーズに開催することが書かれていた。

私は、「勇気と心を届けよう」のキャッチフレーズはすばらしいと思った。このフレーズのとおり精一杯走り、その心を被災地に届けたいと思った。大会前日（3月19日）の昼、サブ3を狙うため、震災の地に勇気と心を届けるために、30キロ以降のガス欠をしないように行きつけのラーメン屋で伝説のサブ3ラーメンを食べ、鳥取へ向かった。不足している練習内容もできるだけ補い、調整もうまくいき、やれることはすべてやった。後はみんなの思いを乗せて42.195キロを走るだけ…

大会当日、7時ごろ会場に到着、まず、2階で特設の募金箱で募金をしてウォーミングアップをした。その後、開催式で黙祷をして、スタートを待った。30キロ以降に難があったので、今回は勇気を持って30キロまで、とにかく飛ばそう、そして残り12キロは耐え切ろうと思って前半から飛ばした結果、30キロ以降何とか持ちこたえて、2時間57分56秒だった。油野先生の前で、また、亡き母の前でサブ3を達成し感無量だった。そして、練習でお世話になった方々、有吉先生はじめ応援してくださった方に報告が出来てほっとした。そして、被災した方に少しでも元気を届けられたかなと思った。マラソン練習の半年の間に起こった出来事、首のうしろの皮膚の病気、母の死、別大、泉州マラソンの失速、震災で開催が心配されたことなどが脳裏を巡った。マラソンとはスタートラインに立つまでがマラソ

ンだと今回痛感した。そして、マラソンとはみんなの気持ちに乗せて走るものだとつくづく思った。

今回のマラソンに参加してみて、被災地でなく震災の影響のないところは、元気を出してイベントを開いて経済活動を活発にした方がよいと再感した。被災地でなく震災の影響のないところが元気でなければ、国全体が、元気がなくなるし、また、こんなときに経済を活性化しなければ、国が沈滞してしまう。被災地でなく震災の影響のないところは、平常な状態を保つことが大切ではなかろうかと思った。

今年は、神戸、大阪で都市型マラソンが開催される。神戸マラソンの大会のテーマ「感謝と友情」の気持ちで、勤務先である神戸の町を走りたいと思う。(しかし、抽選なので走れるかどうか)そして、東北地方が復興して大規模なマラソン大会が開かれる日を夢見て、私は走り続けたいと思う。



新日本海新聞社撮影、提供

大阪マラソン・シンポジウムに参加して

山中 鹿次 (ランニング学会広報委員)

7月30日に大阪市中央公会堂で開催された、大阪マラソン・シンポジウムに参加してきた。主催者挨拶に引き続き、基調講演として有森裕子さんの「私とマラソン」という講演が行われた。

有森さんの初マラソンと91年東京世界陸上の代表を獲得した大会が、大阪国際女子マラソンだった思い出話や、マラソンは同じ42、195kmなのにそれぞれ風景が異なること。そして街の特色を何か反映することを語っていた。

有森さんからは「大阪らしさ」を出した大会を提言していたが、一方で大阪らしさという言葉は庶民性など親しみやすいイメージと共に、ある種蔑視に思える大阪に住む人間として不快に感じることもすらある。大会運営する側のみならず、参加者と観戦者を含めて大阪らしさのはき違えに注意すべきかと考えさせられた。

また引き続きパネルディスカッション「大阪マラソンがめざすもの」が行われた。都市経営や文化などに詳しい大阪府立大学教授の橋爪伸也氏からは、東京マラソンがセレブ枠と揶揄される一人10万円で大会に参加できるチャリティを実施しているのに対して、大阪マラソンが一人500円ずつテーマを参加者が選びチャリティに参加する意義を語っていた。

今は大阪のシンボルの一つ、コンクリートで出来ているとはいえ、再建された大阪城天守閣は戦前に市民の寄付で完成した。一人あたり金額がいくら大きくても1000人くらいのチャリティではその意図は拡がらない。500円ずつでも3万人がチャリティに加わる意義は大きいと思う。

このパネルディスカッションでは、シドニー五輪テコンドー銅メダリストの岡本依子さんや、有森さん、横川浩大会会長が大会への期待をいろいろ語ってくれた。

最後にNPO法人市民活動情報センターの今瀬政司さんが、東日本大震災の現地の被災状態を報告してくれた。4月に開催予定で、震災でコースが損壊して中止になった気仙沼つばきマラソンのコースの状態を紹介してくれたが、津波被害は本当に壮絶である。

しかしながら現地もなるだけ来年の大会開催を実現して、復興の力づけをしたい方針とのこと。不確定要素が多いが、東北各地で復興関連大会が開催され、復興が加速することを期待したい。

今回は、シンポジウムが土曜午後のみと時間が限られていたので、上記のような内容のみだったが、市民ランナーや大会ボランティアグループをパネラーに交えたり、ランニングの大会運営や安全対策などもテーマにして、毎年シンポジウムを継続してほしいものである。



編集後記

鈴木愛子

3. 11の大震災後 ランニング学会大会の中止、各地のランニング大会の中止が続く中関西で都市型マラソンが開催（大阪10/30・神戸11/20・奈良12/11・京都H24. 3/11）される。

申込み開始後、早々と定員オーバーとなり大会参加者の多さに驚かされる。

郵便の時代からITの時代 申込みの時点で差がついているような気がする。

歩き・走りの世界を安全で楽しいライフワークとしていく為に、ランニング学会の社会性をもった情報発信は大切になっていくと思う。

新体制のもとAVRC会員の学会加入を望みつつ初心者指導に役立つ情報発信に努めたいと思う。

山中鹿次

いよいよ大阪マラソン、神戸マラソンが近づきました。懸念された既存の時期の近い大会も参加者が減らず、例年より定員到達が早いケースが多く、昨今のランニングブームの多さには驚かされるばかり。

来年の東日本大震災1周年の日が第1回目の京都マラソンと名古屋ウイメンズマラソンですが、これらの大会も震災復興に協賛します。ランニングブーム拡大が一過性にならず、震災のみならず長引く景気低迷の打開などにうまくつながっていけばなあと思う昨今です。

保原幸夫

東日本大震災で多くのランニング大会が中止された。ランニング大会は実際どれだけの影響を受け、中止になったのか？逆に開催された大会はどれくらいあるのか？について調査・考察をしてみると、面白い一面が見えてきた。

物理的にはほとんど影響を受けていない地域でも、多くの大会が“自粛”という名目のもとに中止を決定しているのだ。こんな時だからこそ開催して被災地を元気づけようという大会もあったが、極めて少数だったが、その多くはランニングクラブ等が主催している大会だった。

日本にはレースディレクター不在の公営マラソンが多く、そのほとんどが“自粛”という国民感情を受け、短絡的に中止を決定している実態が垣間見られたのである。9. 11後にニューヨーク・シティ・マラソンが開催された経緯を皆さんはご存じだろうか？その時のレースディレクターと市長のやりとりとの対照は興味深い。

ランナーに対するアンケート調査でも面白いことがわかった。大会が中止されたことが理由で日常のランニングを止めた人が極めて多いのである。やはり、ランニングブームではなく大会ブームだったのだということを再認識させられた。

関西を中心に柳の下のドジョウを狙った(?)大都市マラソンが続々とスタートし、人気を博している。大会ブームに終わらせず、せめてランニングブームに引き上げ、願わくは本質的なランニングウェーブにするために我々は何をすべきかを考えてみたいものである。

鳥井健次

3月11日に東日本大震災・原発事故があり、「国難」ともいえる未曾有の災害となりました。半年以上もたつ現在もまだ、多くの人が避難生活をおくり、被災地の復旧・復興、被災者の生活基盤の回復など懸命の努力がすすめられています。

東日本大震災は、スポーツ界にスポーツにできることは何かを問いかけました。スポーツの持つ役割を考えさせてくれました。安心して生活できる環境を整えることなくしては、スポーツを楽しむことはできません。それでも、日本のスポーツトップ選手をはじめ、スポーツ関係者が被災者を激励し、救援募金の先頭に立って活動して被災地に勇気を与えました。私も、10月に仙台と盛岡でランニング教室の講師を予定しています。少しでも被災地の復興の手助けができればと思っています。

今回のニューズレターは、発行が遅れ、不十分ですが、ひきつづき学会大会の内容、指導者養成、ランニングクラブなどの情報を伝えていきたいと考えています。みなさんもランニングのさまざまな情報、自分のランニングライフ、ランニング学会についてなどなんでも結構ですので、A4で1枚程度にまとめて、メールで送ってください。よろしくお願いします。

メールあて先：torii@jcp.jp